

本古義

412	一七	和書門
152	二九	
58	三七	
58	七七	
58	七七	
冊架函號類		

230

五	一七	和書
四	二九	
函	三七	
一	七七	
五	七七	
架冊號類		

兵法十一三

內閣文庫	
番號	和 17297
冊數	5 (1)
函號	154 230



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



天保戊戌新鐫

南紀 高木正朝大人著

日本古義

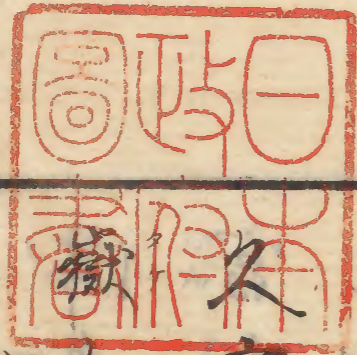
全五冊

浪華書肆

田宮蘭蕙堂梓

花廬家文庫

浪華文庫



日本古義序
 大伴宿禰家持卿詠
 方北天志戸初冠き高千穂乃
 天降し皇祖北神の御代
 正櫃弓以手握り毛多木真鹿見
 矢を手扱玉地屋多久采志夫
 夫武男を前より去るく鞆也紫負勢

山河を岩根イハノネにクニくみ多フミト踏通トホ王國クニ
 求マギ志シ行ユク千チ早振ハヤブル神カミ武ムス言コト向ムケ不マツ伏ロハヌ
 人ヒトをヤハ崇ヤハ和ハ十ハキ掃キヨ清ツカ先マツ仕マツ奉マツ事マツて秋秋アキ
 津ツ嶋シマ倭ヤマト乃クニ國クニ志カ白シ橋ハラ原ハラ此ウチ敵ビ火ヒの
 宮ミヤ尔シヤ交フ柱ト太シ敷キ去タテく下知シ石シをメ
 親スメ天ロキ皇ア此マ天ヒ志ツギ日ヒ嗣ツギとフギ繼ク多ク来クる
 王キミの御代ヨにヨかアくカ河カをカ思アカ希カを

日本古義序ノ一

心ココロをス皇メ方ラ有ベ窮キ盡ハくツク仕ツカ来ク親オヤ祖ヤ
 志ツカサ職ツカサ望コト言ダテ志サツ多ウ授サツ帝ウ孫ウ子ミ孫ノ孫コ
 此イ孫ヤ次ツギ之ノ見ミル人ヒトのカ語タリ序ツギとキ同ク
 人ヒト乃カ繼ミ尔ミをカ志カとカあカくカ志カをカ清カ
 此オ其ホ名ナとオ愚ホうホみホんホ思ホひホ多ホ志ホ言ホ
 毛オ祖ヤのタ名ナ勿ナ絶ナ大ウ伴ヂ志ウ氏ヂとナ名ナ子ナ
 負オるラ夫マ夫ス男ラ此ト輩モ

本末此心も志取と
梓弓花きそを
古こそそこれ

本居大平

日本古義序ノ二

日本古義卷之一

紀伊 高木尚三郎大伴正朝 述

射禮

吾 國シヤライに射禮シヤライを 皇祖スメロギソビラ背チ尔ノリ千箭チ乃ニギオ鞞タムキ負ヒ以ニ臂ニ也

稜威イヅの高鞞タカガを著ハ弓ユ彌ハツ以テ振起フリタ天下テを治メ給

ふ是弓矢以て國家を治むる禮其本あり人皇

其御代に至り天子自ら射場殿トモ出シて御

座此左右に御鞞トモ御弓矢を立られ王卿より大夫

士り及ぶやで百寮トモ詔シりて射禮を行とせ

太古と記せ
ハハ神の代
を以て
上古と云ふ
ハ人皇の始
と云ふ頼義朝
臣の時代
でと云ふ
古代と記せ
と云ふ頼義朝
臣の頃より
鎌倉殿の代
までと云ふ

中古と記せ
る北條家
執政の頃
足利家
代々てを云
ふ
首書ふ古義
と記せり
太古より上
古よりを云
ふ
本義とあり
と古代より
中古よりを
事とあり
中古より以
來をいふ
と

らゆ吾 國神武弓矢能大禮おれを其儀式い
 嚴重ふして其始終能威儀其度にあつて聊も
 失禮なく揖讓進退若儀正志く行ひ中も多^{アタリ}れ者
 ふと舞樂を奏し多祿賜とて事常例多雪
 玉集ふ
 雲此上や春乃始若梓弓居待の月尔出る諸人
 年中行事歌合り
 梓弓射手乃はらけを引連てかへる主と氣色
 殊なる其射禮代行ふも第一射藝尔能達せし

目古義二一

上古射禮小
能射を選む
と古義

歩射騎射を
試みて人品
を選んぬ
古義

射禮ハ國家
大事とい
ふ古義

上古大射尔召らるる事國史に載きり 其禮行ひ
 能射を選んぬ事國史に載きり
 が多し射藝未熟ふを其場尔臨る心迷惑志
 て進退其度失ひ容儀正しかりぞ然る故に
 射と禮一和をばれを行ひ得る事か多し此射禮
 を行ふ時を其人品容兒威儀善惡明る尔見ゆる
 あり古へ諸衛人士を選んぬふと必歩射騎射
 と試くられし事延喜式に記せりしを 淳和
 天皇天長二年正月に 勅尔を射禮ハ國家に大
 事めて闕べからざれと日本書紀尔見えり

後乃代尔至了 朝廷其射禮廢多其禮式纔其
 武家其傳より鎌倉殿其代よ至了了右大將家殊
 尔此禮式重ト給ひ再び古義を興一給へ了
 射禮と 天智天皇七年辛巳士大夫等尔 詔一
 と宮門の内よ大射せしむ 清和天皇貞觀二年
 正月十八日に豊樂院尔幸して射を觀給ふ射席
 西行三十六歩よ第一其候と張る牛乃皮式以て
 是を爲し候の後四丈許尔山形と張る 紺木工寮
 史生的と懸る的ニ尺五寸板式以て是を編む的

日本書紀二

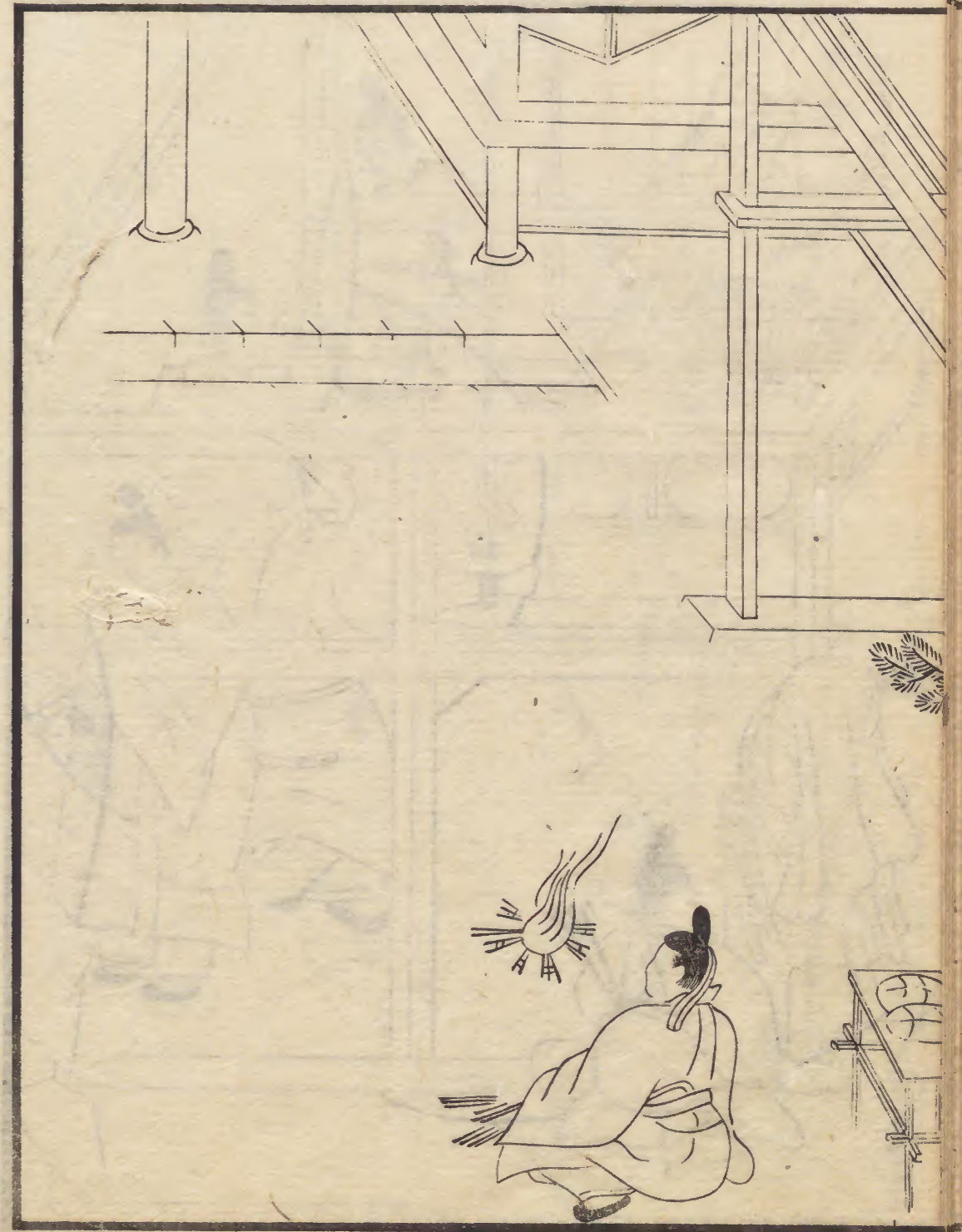
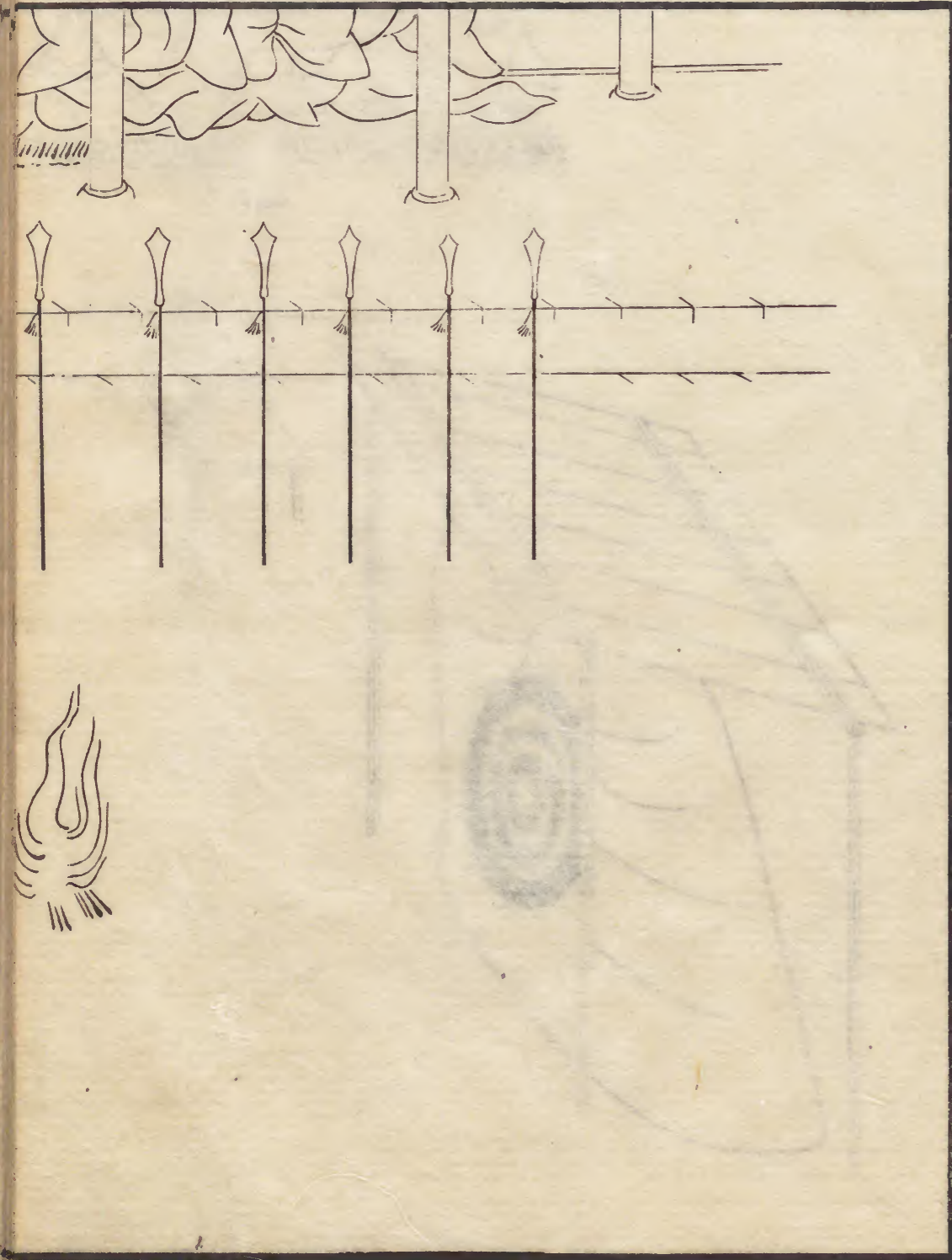
中其所の疎
 密に隨ひ祿
 を賜ふに差
 別ある古義

と候尔懸る處より第一其候を左右近衛左兵衛
 射る所おて其南よ第二其候と張る右兵衛左衛
 門射る處より行幸其時ハ王卿以下是と射依賞
 物を置大藏省祿式積鉦鼓と立矢乃疎密に隨て
 鉦と叩く數より外規オキ一聲次規オキ二内規オキと三聲お
 て候尔中程を白旗を以て中る所を指示と所皮
 一皮二を稱と依よ隨て即鼓を擊射手起退次規外
 次規内規と一乃黒二其黒三其黒を云ふなり中
 其所の疎密尔隨て祿を賜ふに差別あり祿と布
 其か



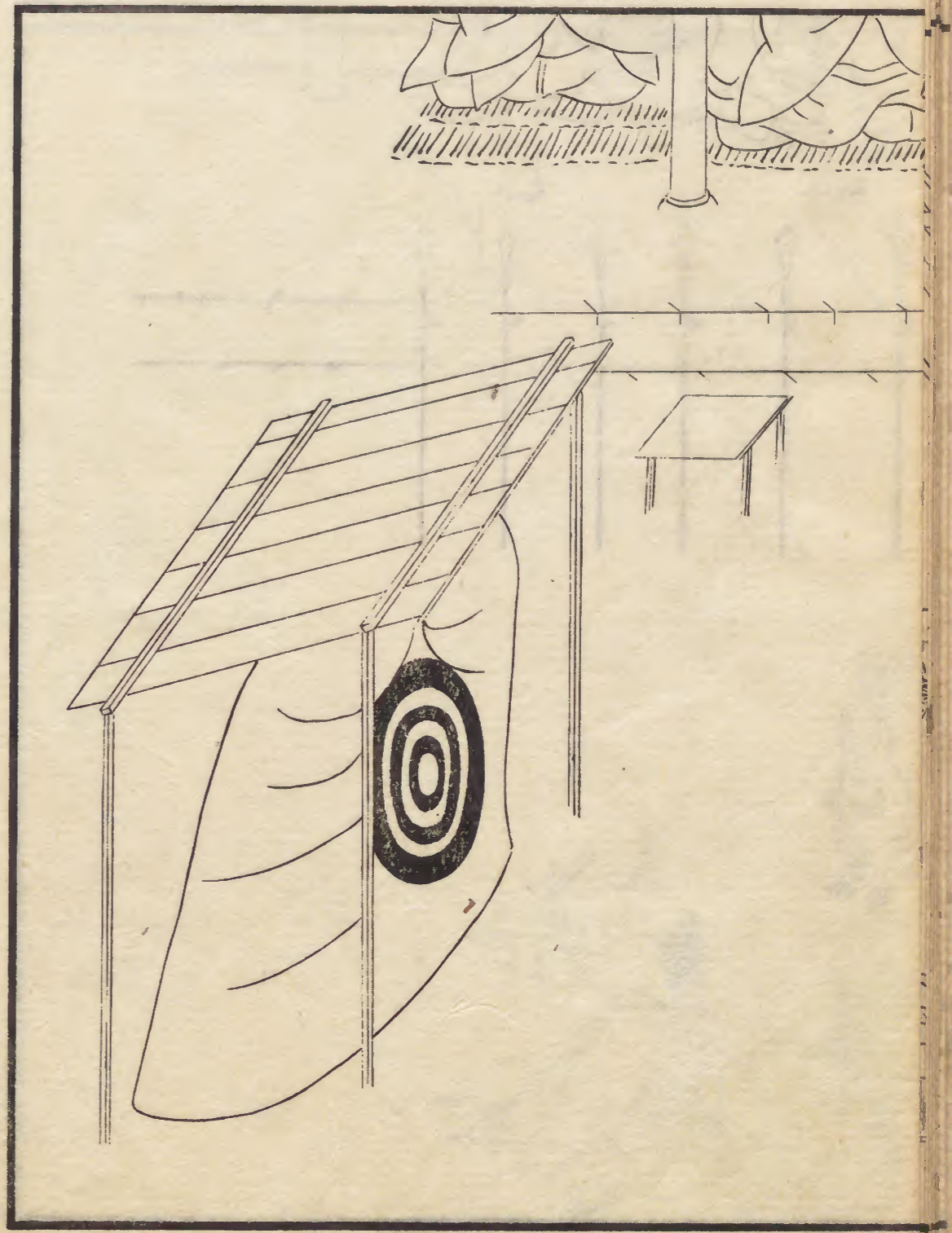
年中行事
御射場始畧圖
土佐光長画

日本古義一三

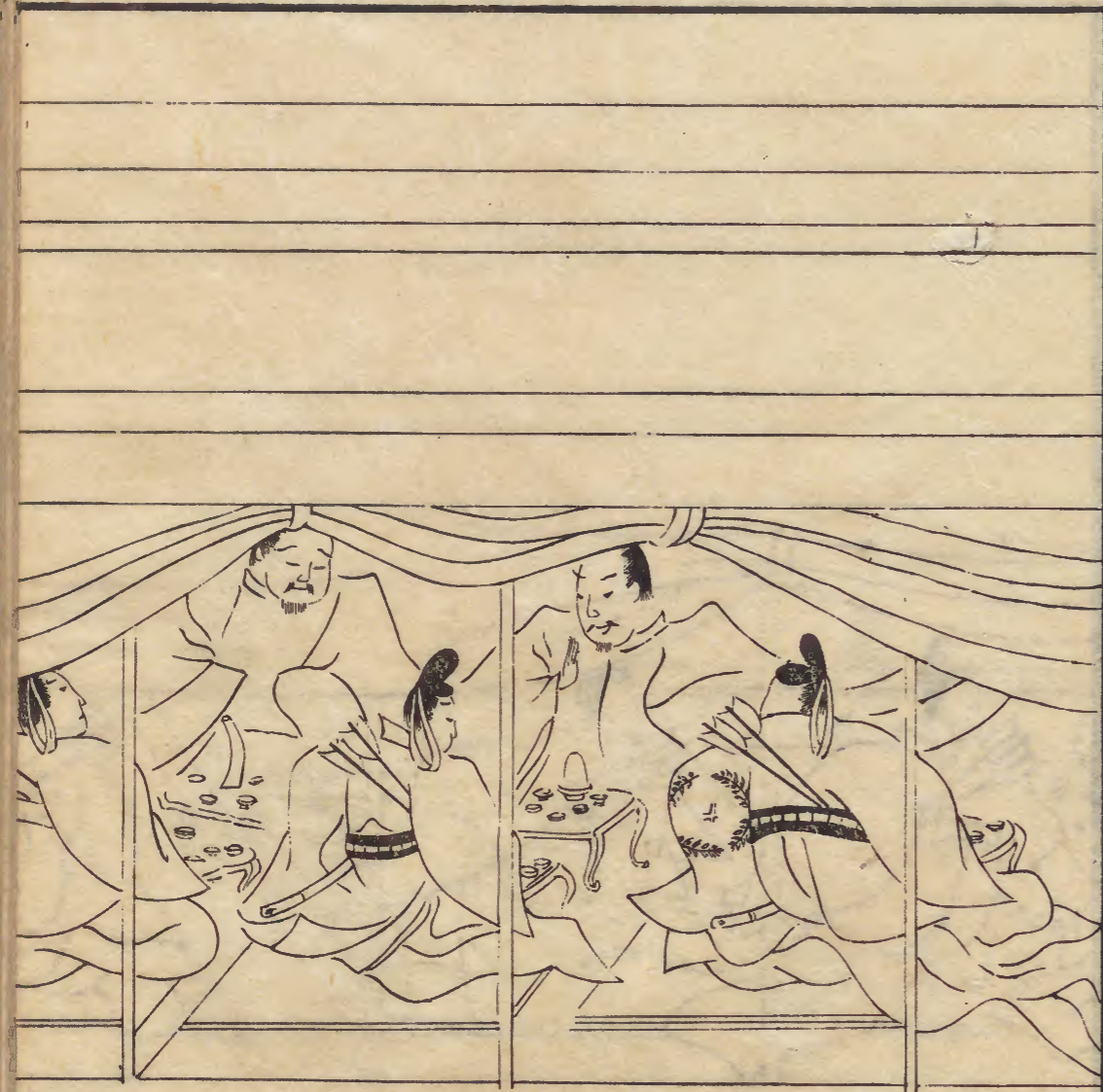


日本書紀一ノ四

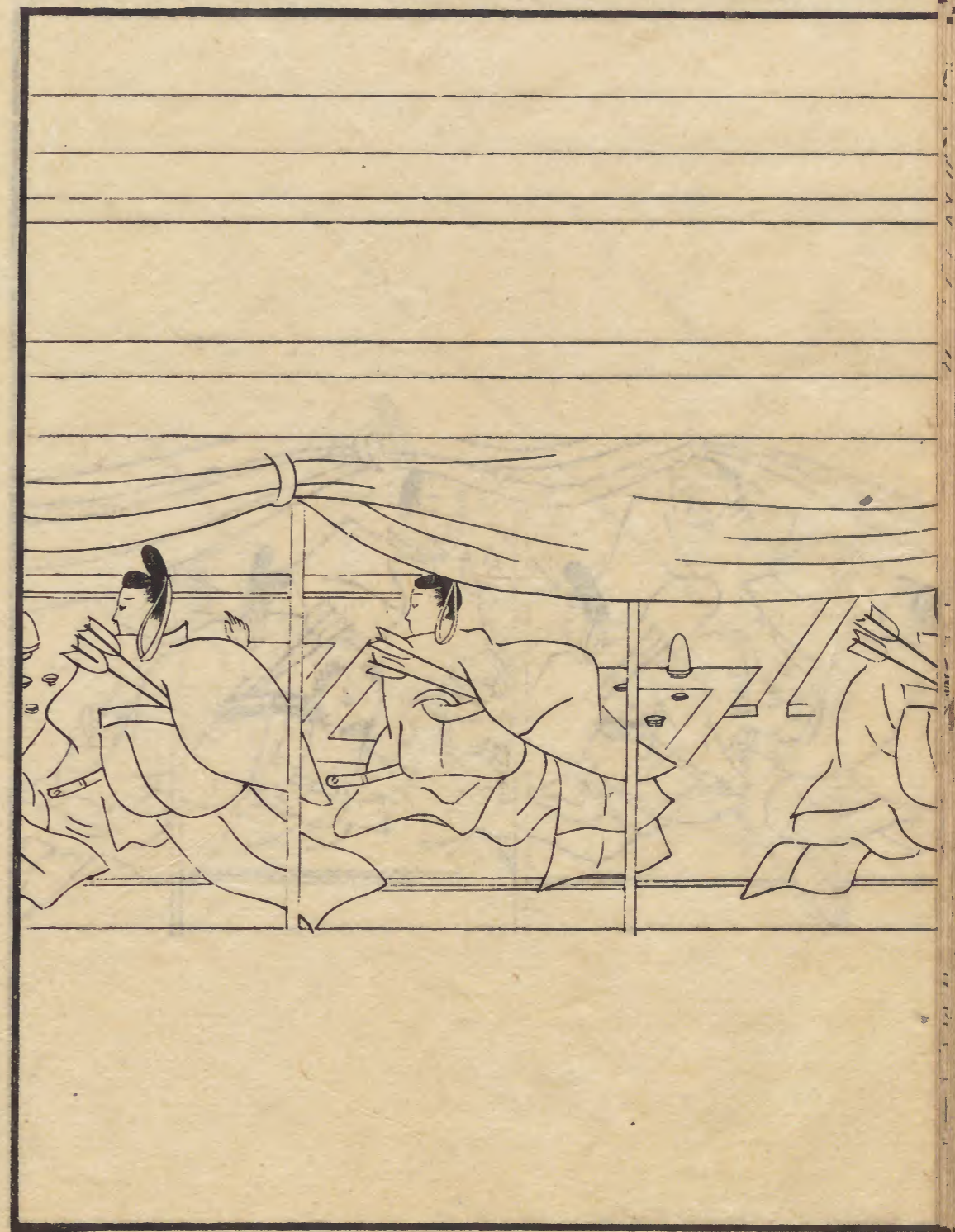
同
射遺賭弓畧圖



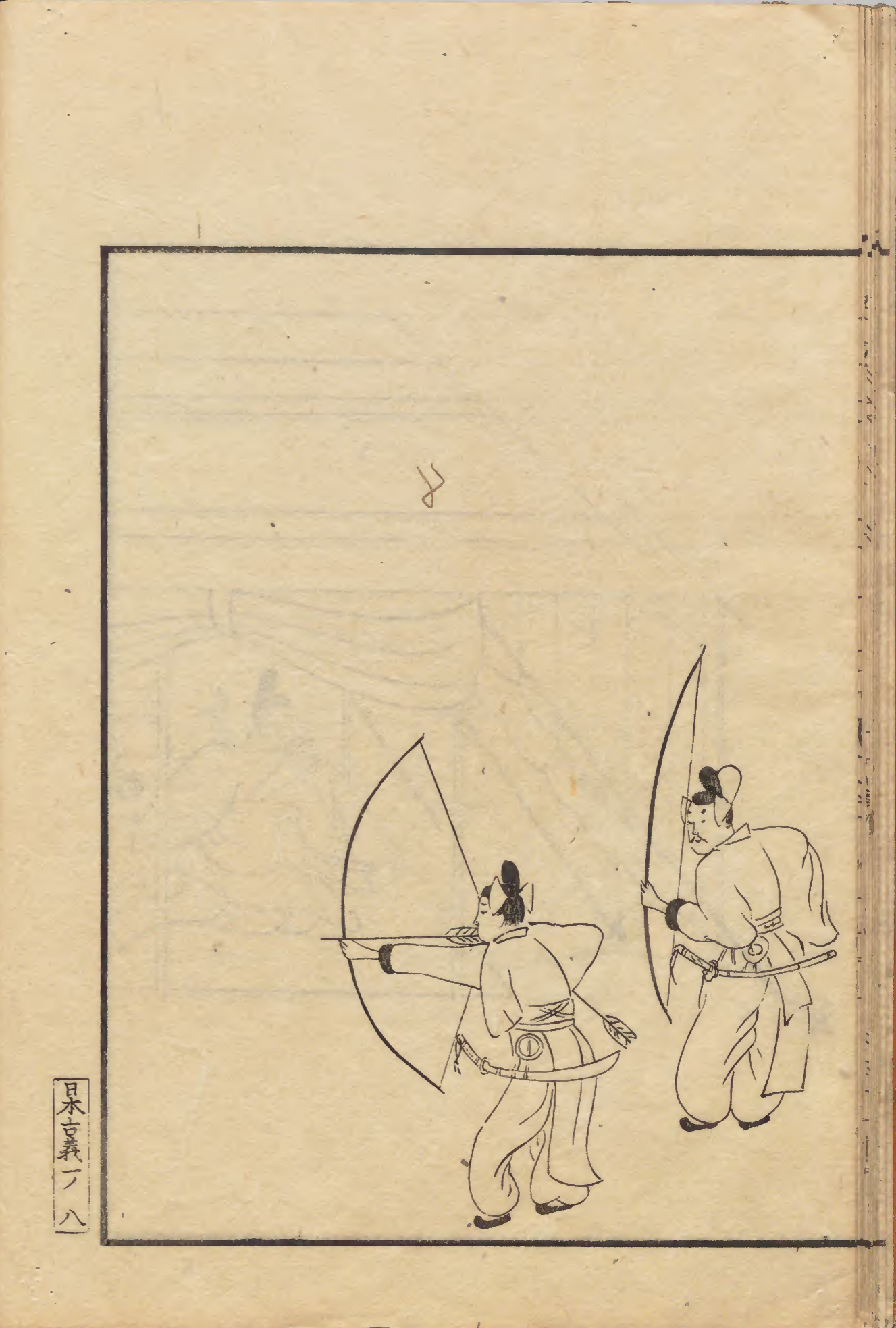
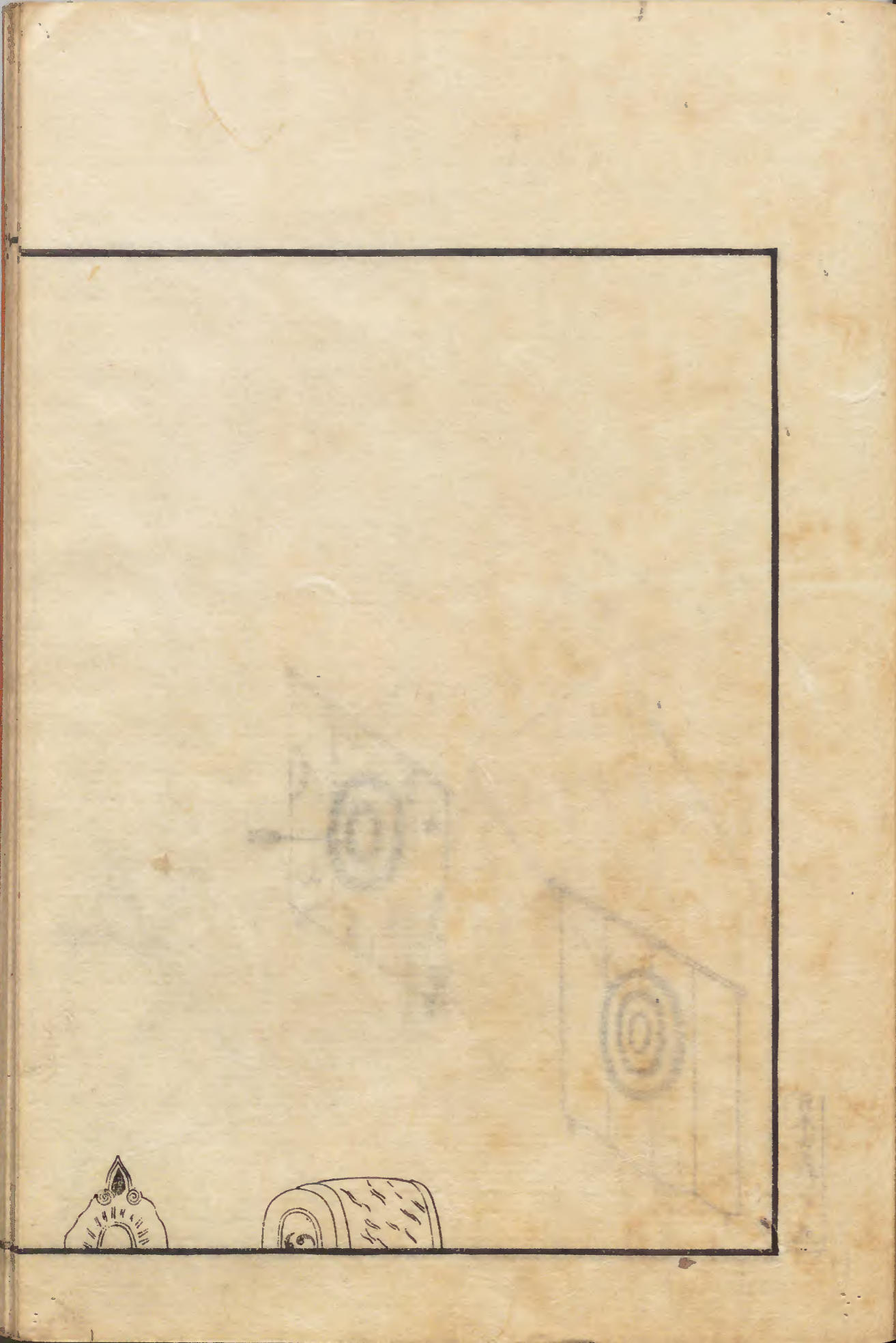
日本古義一ノ五



日本古義一六

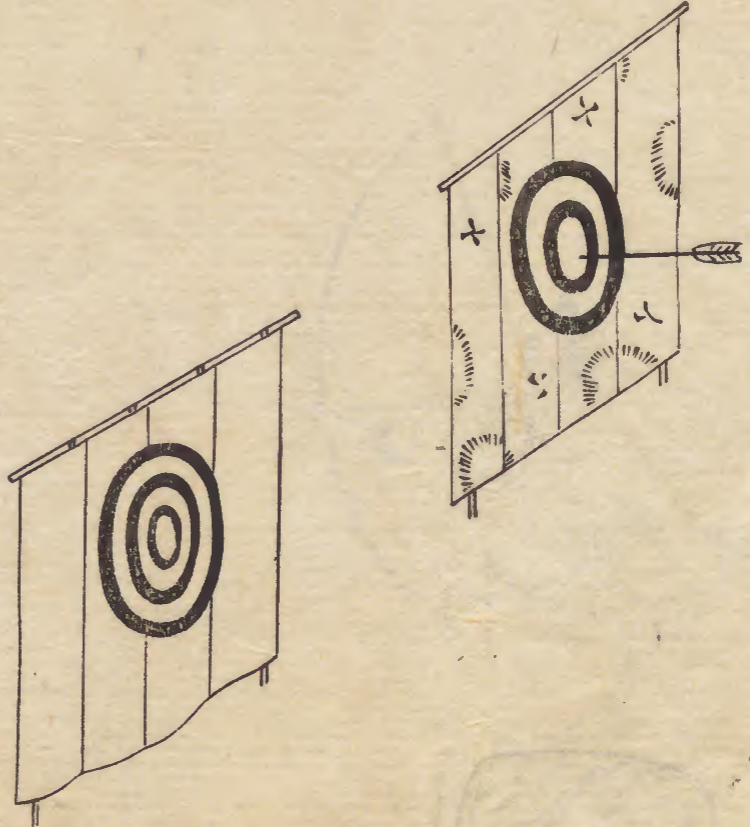
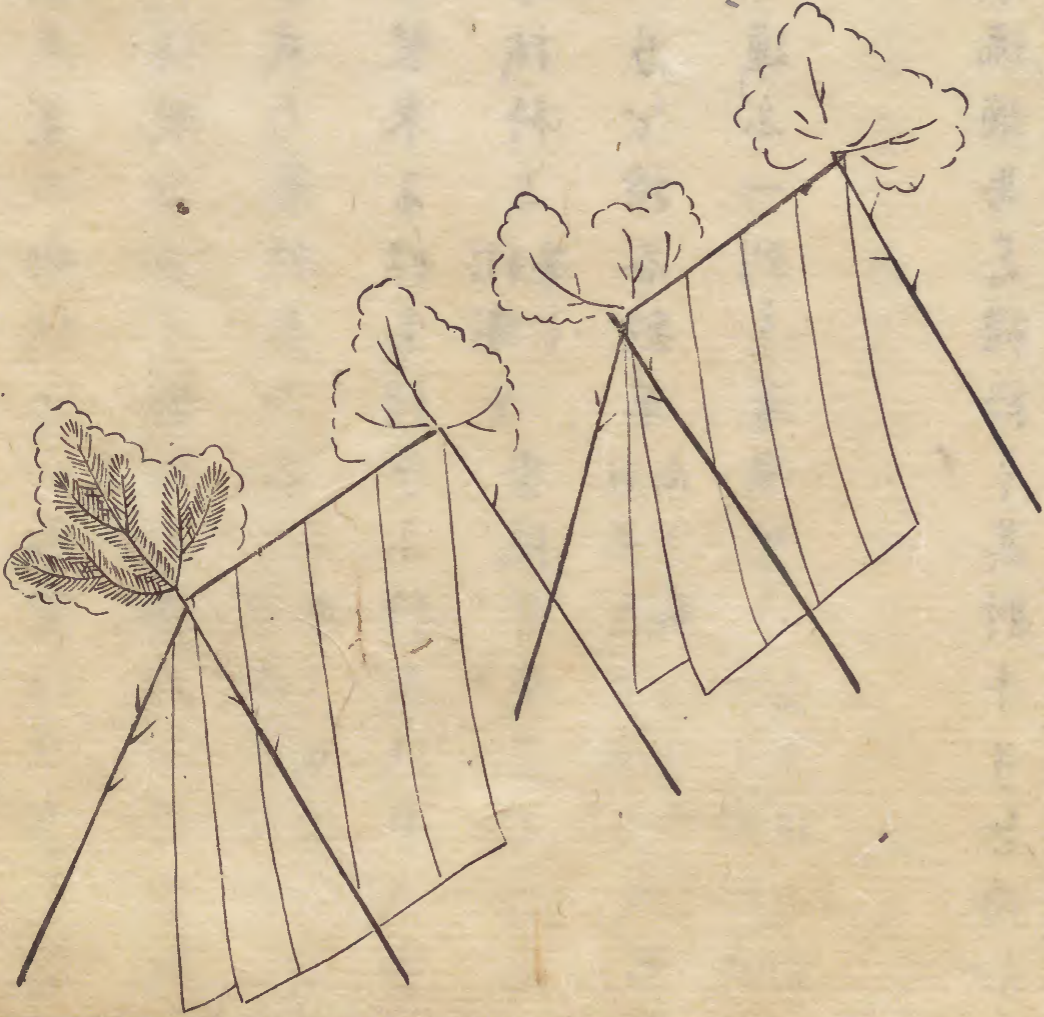


日本古義一ノ七



日本古義ノ八

日本古義



日本古義
一ノ九

行勝と狩場
乃具あり故
小禮式は
用いざり
古義

騎射と 天武天皇の御代也 叡覽ありしと
代々 朝廷武徳殿に於て騎射の禮式を行はれ
其 叡覽に古式の圖に見ゆ 正朝在京乃日
見れ物と 射手の装束は烏帽子に狩衣に著て弓
手に手貫タスキを著括袴ハカマを 行勝ハカマを 沓ヤナグヒに著夜奈ナグヒ久比ヒを
負ひ 鏑カサネ矢ヤ六本 弓と持各敷革 白毛を正面に敷
て埒アハ外埒ソトアハの通ス一列イツレツに著座せり 以上騎射濟
體タマシと
競馬の式と本流鏑馬の禮終る其射手弓を持ふ

日本古義一ノ十

太刀小弦袋
と附る古義

馬を番ひ勝負以試みしと始きて故尔流
鏑馬の式終る後めて競馬の式を行はれ例なり
其馬を番ひて驅る體後を騎人イリテと後より手紙
差のべ多先此騎人若手をとて互尔手を取組
て連るて驅るをりり又後より胴衣にえり首と
引捕へおどちて互尔大り勝負を争ひ驅る式な
る其競馬の装束もそれいかにあうけする冠に著
左右に手貫タスキを著胴衣を著る太刀と佩ハカマ袋フクロを取る弦
と括袴ハカマを著る行勝ハカマハ 沓ヤナグヒに著る此競馬の装束也

弓小手と著
古義

馬手と
名義

弓小手と著
義

右も小手を著と鞭打る便よれ多免なり右も馬
 と手おもむき馬手今世も流鏑馬の式より兩小
 とはいふなり手を著胴衣に著る事は古義なり次歩射に
 と靴トモを著騎射もぬ弓小手に著事ハ射禮乃古義
 かも弓小手ハ太古老手タスキ貫の遺製なりタスキ
 上古も狩衣に袖乃露を志ぼりて其上も
 靴を巻くなり是も今も弓小手の製あり鎌倉
 殿此代も多多く革成を造るは是狩場も用ひ
 今も此形も今の世も弓小手に紐を革成用ると

果古義二十一

行騰と古義

古製みかこらを遺し多ふあり

行騰ハ本狩場

此具ふして自然落馬形どの時ハ疵を防ぐん多
 免なり端ハツリ反乃笠をかひるも其爲る也夫木抄ふ
 夏野ふむむと行騰をせらるるかひむむと
 形くらしき形も又熊の皮乃行騰ハ貴人
 若用ゆるも此形ハ衛府装束抄も大嘗會に御襖
 中い婦も下臈を御被に行幸と名は常ふる蕪芳
 乃褐も熊の皮のむらむら成をなかり中
 きてるがかけ童舎人已上三人を具するありと

日本書紀
彦火火出見
尊海神乃宮
よ入て給ふ
時豊玉彦自
迎ひゆり
セ々海鹽皮
八重と敷
其上座奉
らむとい
ふ是敷皮
古義あり

見えり又義家朝臣奥州より御歸洛其時熊の
皮乃行騰を著給ふ近士ハ皆鹿乃行騰成著一圖
と後三年其繪ふを見えり題林愚抄
五月雨尔熊其むらむれりやぬきて明行射手
や宿にかさらぬれりて免て此行騰ハ常ふ懸
置とれり但右革をバ下り左革をを上にして
懸置あり夫木抄
とふ意志とををふとて梁に行騰うけ
や次むらむ君とあり 敷革ハ居敷革あり行

日本書紀二十二

流鏑馬を神
事に行ふ古
義

騰を著る腰ふ當ふとれり衛府守衛其武官束
帶乃上ふ敷革を腰ふ當歩行をるふを腰緒より
結び附るなり
今此世加茂乃御祭禮亦行はれ競馬の式と
上古 朝廷より行はれ流鏑馬此古例あり此
例小倣ひる流鏑馬を神事に行ふ禮式とあり
多し神乃御前より於て射禮を行ひて神照覽
備一奉る弓矢を以て國家戎治免給ひ
神恩を告奉る意あり是今此世亦諸社乃神祭
天下泰平乃祭禮なり
競馬れ始ふる必流鏑馬の式を行ふ事は是上古

朝廷より行くと流鏑馬は古例に據るなり
 正朝日向國延岡に在り時正朝射藝指南に記す彼國に滞留せり同
 國宮崎神武天皇に御祭禮の流鏑馬を見物せ
 凡馬數千七八百騎を餘り此流鏑馬此國乃田夫等
 競馬を流鏑馬といひ騎人を射始むる前神主
 手といひ是古き云傳へあり
 神に御前より於て流鏑馬の禮式を行ふなり其
 射手といひは十三四歳より十五六歳に至る
 各弓小手を著端反り笠をかぶり馬は鞍代敷は
 皆裸馬小く腹帶も足を踏らぬ二十騎或三十騎

果古義二十三

碗飯の故事
 碗飯ハ御玄
 猪ハ齋より
 始り

むらり馬に鼻を雙々相圖を聞と等しく十度
 小馳出次其疾を事矢の飛が如く孰も勝負を争
 ひ驅る其雄々敷事又比いむをのれは是吾
 神武に國乃の事をしりるべし勝多し射手ハ其
 村中酒飯を振舞ひ大よ是祝を例あり是
 を碗飯振舞といひ碗飯を小豆飯なり又同國高
 千穂に郷を太古皇祖乃御座せし神跡ふり
 吾國開闢に舊地あり正朝彼地より到り其
 神跡を巡見する高千穂の郷を凡行程二十里餘

其間を山又山に連て或綱を脊或日乃影かとい
 へ子嶮難を坂路を踏分も亦三田井に里とい
 ふ所より到るうと方一里をみたり其間平地に
 あり即此地を皇祖の御座せし神都の舊跡なり
 古事記日本書紀等に記載する所悉く其事跡現然
 あり其地は奇景幽古ありて之を愛ひし者あり佳境
 ありと云々此所の風俗を見れば男女寒暑別れ
 なく其地は産物を麻布に白と衣を著麻布或繩
 たりと帯と次男女山路を歩行ハ皆素足ありと云

日本古義二十四

弓執といふ
 古義
 弓執といふ
 男子の稱也
 響矢といふ

其質素なり事是亦詞を盡しべからむ郷民山業
 のいやまあり皆弓射る事と云々常々其地よ
 り異所^{コトトゴ}み出る者あり實に太古の風俗存と云々
 地といふべし此地の郷民弓射る事以常々す
 皇祖弓矢を以て此國を治先給ひし太古に
 遺風ありて弓射る事ハ士農の常々大夫男を
 以て弓執といひ山城國藤の森に神社を奉
 神武天皇日本武尊神功皇后武内宿禰等なり是
 を弓兵政所と稱は是弓執といふ古義なり又
 上古の響矢なり雄と云々響矢ハ鳴鏑矢あり昔

名義
破魔弓といふ古義

弓矢の家といふ古義
弓矢の家といふ事ハ武家に限らば四民の家屋をいふなり
弓矢の道といふ古義

又男子を祝ふ多弓矢以て破魔弓守護といふ殿
屋を造る多棟み弓矢と建る家運長久に守護
せし弓矢此家といふ事も是皆弓矢の徳也貴ぶ
古より若遺子にせしれり皇祖神武に弓矢
を以て吾國を開かせ給ひしより弓矢の道と
をいふ事也弓馬の道とれらる弓矢此道の禮の
道也いふ義ありて射を禮の本あり是皇祖に
御教に多射禮を國家に治むるに大元あり

笠懸

笠懸を
諏訪の神事
小行ふ古義

小笠懸乃始

笠懸乃始を延暦二年三月田村麻呂將軍東夷
征伐若時信濃國諏訪に御社所願ありしに
て給ひし時神託ありしに神前ありしに騎射ありしに
笠を木に枝ふかき多射らししは是也笠懸と
名けし此御神事笠懸射て進らす例也若し騎
射習練に藝しそふれて遙小世を隔て鎌倉殿
乃代に至るまで專笠懸の式を行はれり小笠懸
の始も笠懸を射る時を以て馬場代逆馬を
返して伏鳥を射る意も多戲も馬手此大地一

射付ありし事より始きて其射様ハ身を治らむ
馬の頭み下し案前を射とすし形り此射様あり
と怪れりし殊に馬手を嫌ふ射業ある故鹿苑
院殿若代射様を改めし程多押とらして射る
事よはなごあり鎌倉殿池大納言頼盛等此客代
伴ひ由比の浦より船をうらべ杜戸モリト岸よ到り
て此所の松陰カクありし小笠懸ありし程やれ土風形
に此儀ありしはまむ他此見物ありべかりし
より宣ひしとて東鑑に記せり此小笠懸を騎射

傍示繩といふ本義
疏道を作す
本義

乃業達者代第一也して殊に其射手を選りし程多
に其場式は定ありしとありしは次杜戸乃岸よ到
りて此所の松陰より小笠懸ありし程記せし如
く由比若濱に廣く所ありし臨時何地ありしと其場
所をれと見て所より小杭と打ち繩を張て埒と
馬を通しし事あり今此傍示繩を此古形を遺
し多あり又笠懸乃馬場小疏道サテを作し事と始
めて馬を通しし事あり其足跡代とらり見多の
遠と定えし事あり疏道をけを來りし流鏑

馬笠懸け式と同し騎射習練の藝なりやいへど
も流鏑馬乃式と上古 朝廷より行はれり弓
馬に禮射あり笠懸を専ら騎射習練の藝なり

犬追物

犬追物と追物とを跡をり追かけ射るといふ
詞なり追つ捲つ疏うり射るといふ
追つはく多末廣くゆゆを近く寄るといふ詞
疏ふりけりハ疏を日當小追ふゆいふ詞なり
本狩場を習はり始るる案鎌倉殿乃代弓馬の
藝習練の多免狩を専らにせり終り
狩ハ農民に
愁ひを除く
むがを其猪鹿成射習ふべき爲に蒙る鹿は形
り那に

草鹿の本義

泉古義二十七

と造る草こく鹿尔准へる草鹿と名なり是
成射或由比に濱ふり小牛を射るり一事もあり
是と牛追物や名をとり其後頼經將軍の代に至
りて牛追物を息らまきり犬成射事なり
其儀式は全く定まり鹿苑院殿の代に始り終
るり流鏑馬笠懸犬追物狩場は稽古と畢竟軍陣
乃懸合弓馬若藝の習練なり
弓馬と別藝あり
比弓とと歩射なり
馬とは騎射なりや軍防令に記せし如く騎射相
共ふり多弓馬を兼備の藝なり故に弓馬は藝と
なり

弓馬の古義

後醍醐天皇乃御代尔時の武將一 詔

りり多咎形を犬を射べか、ばと天下犬追物と
制禁ありし時小笠原信濃守貞宗目安をそそ在
京此輩常ふ犬笠懸興行をばむいりての朝敵を
防たやうらむと言上りりし故尔制禁をゆるさ
そそやれり又犬追物代々再起をれりり
り今此世に至りては細川家小犬追物其式を行
る稽古も月正朝肥後熊本に到り清正神儀
次ありり
へはうて密小其式を見物せり時天保三年壬辰二月上旬乃
頃其禮式いや嚴重ふりて各騎射相共ふ練熟し

其勇威其盛形事觀るを其又眼を驚らせり是
と吾神武此國乃遺風あり

梓弓むうをむきて武士其帯りたるれ
はりし若みりありとれん口號をぬ其肥後其
藩尔齋藤權之助といへり馬此達人りり吾師
東使八大夫恭居ヤスタカ同志其輩あり又當時讚州京
極家大追物乃式を行く當家其射禮を預れ
師範ハ多賀豊後守が一家の孫松井一磨カマテといふ
其藩其人ありて馬乃藝も達し繁

射藝

日置彈正正次ハ吾國射藝中興ノ祖ニシテ其功誠ニ大ナリ他ノ小伎トシテ絶多クを興シ廢セテ之ヲ繼グ以テ大功ニ成スルヲ以テ神武ノ國第一ノ弓矢ヲヤ今若ク世ニ當リテ是レ日置此流以來纔ニ其古義ヲ復興スルといふべシ凡射藝ハ其眼ノ觀ル所足リ踏む所弓乃引ク所矢若ク彈ツ所悉ク規ル所ニシテ矩ホある家カ形ク次其志正ク志テ其體直ク氣總身に満ル多ク生活ノ弓此性ニ逆フ

日本書紀二十九

事形ノ弓ト吾ト一體ニあり精神天地ヲ充ルガ如クタゴ鼓タゴノ満ル時多ク神定テ念を動ス多事れク無心ルシテ彈ハナ次彈ハナテ後尚本モトニ吾形ノ物ホ中ニシテ後静シニ多ク弓收納ウケむカク色を則遠ク矢を送リテ堅ツニ貫ク吾精神弓ト一體ニシテ時ハ弓ホ神カミノリク其徳をあらシム是心ホ徹シ事ニ熟シ修體ニ功を積ムホあるを其徳成ナルニシテ事カ多シ既戰場ニ弓收ウケハニ二三間ホシテ中ナヲ宗トシテ弓ホ多ク勝負ニ世を敵ノ德

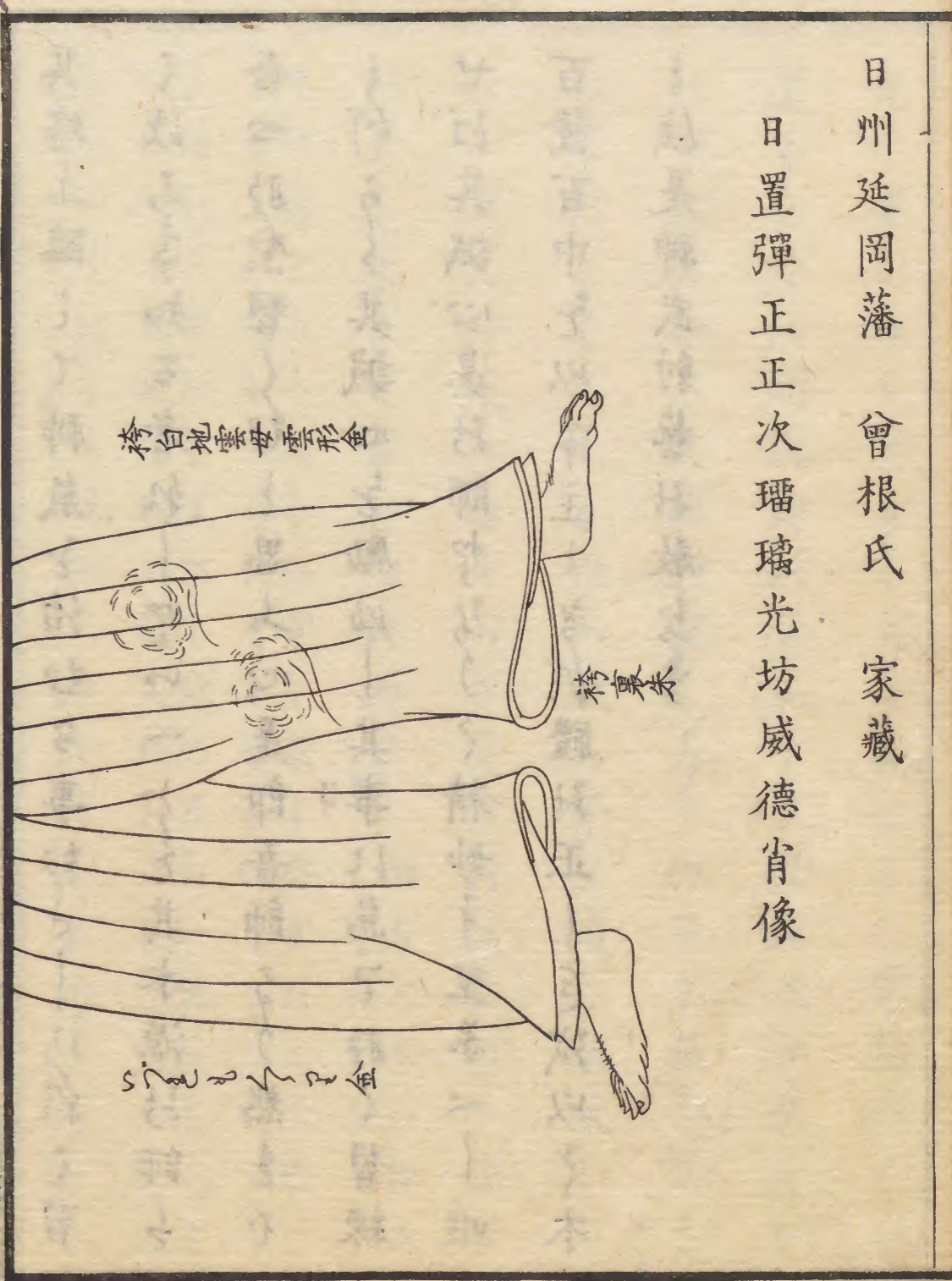
先乃擧ふ届く所あり矢を彈ハせと一宮隨波いひ
遺ヒり昔江州内野能合戦日置彈正が矢先よ
た多れ者あり矢種射盡しありける敵襲オヒ來を
を弦打しとエイといふ敵其聲を聞き逃散し
といふ其神氣能動うばる英雄能爲事想ひ像ハる
べし是兼る七常を心的ゆゑし其勢五尺二
寸或據こいふ時を五常を表し忠孝能二つ當べ
し常ふ此七を心の守ふ時をのけい
正的れ小眼に中るべし規の黑白ハ善惡者二つ
とゆべし武藏守頼之評定所能正面尔的の画圖
をかきしれし此守る神武能士ありしを
意味せ見えあり

早古義一二十

其場ふ臨いて神氣を治むる事かゝりしれを習
ふ候志多知る者れしやいへども其本源能師と
吾心能練習しむと思ふ心是即吾師あり然をを
いひし其誠心を勵はし其事ハに怠りし習練
せば其誠心真能師ありし精妙に至るべし唯
百發百中を以て主とし禮能正しと或以て本
と次是神武射藝能教あり

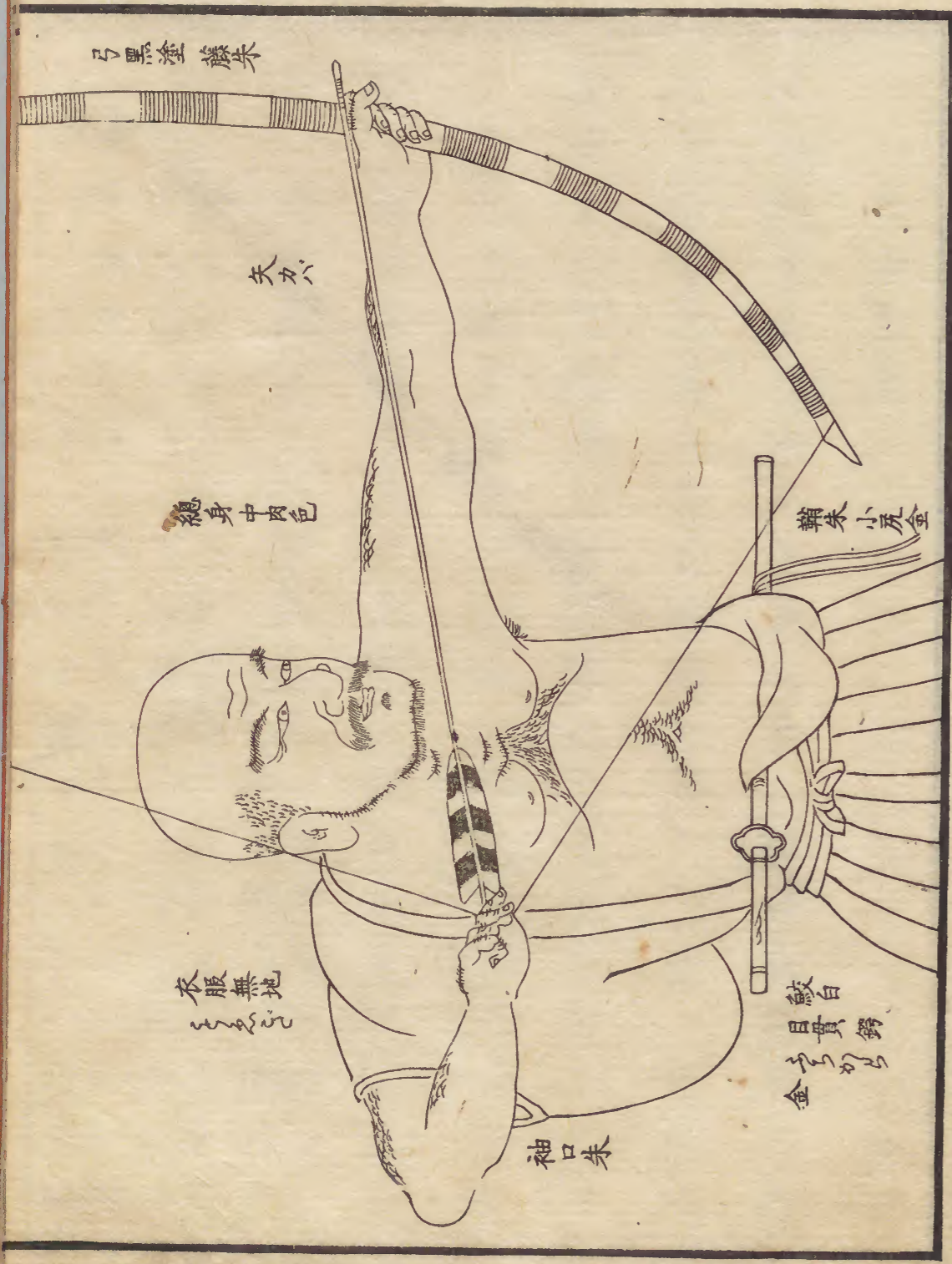
日州延岡藩 會根氏 家藏

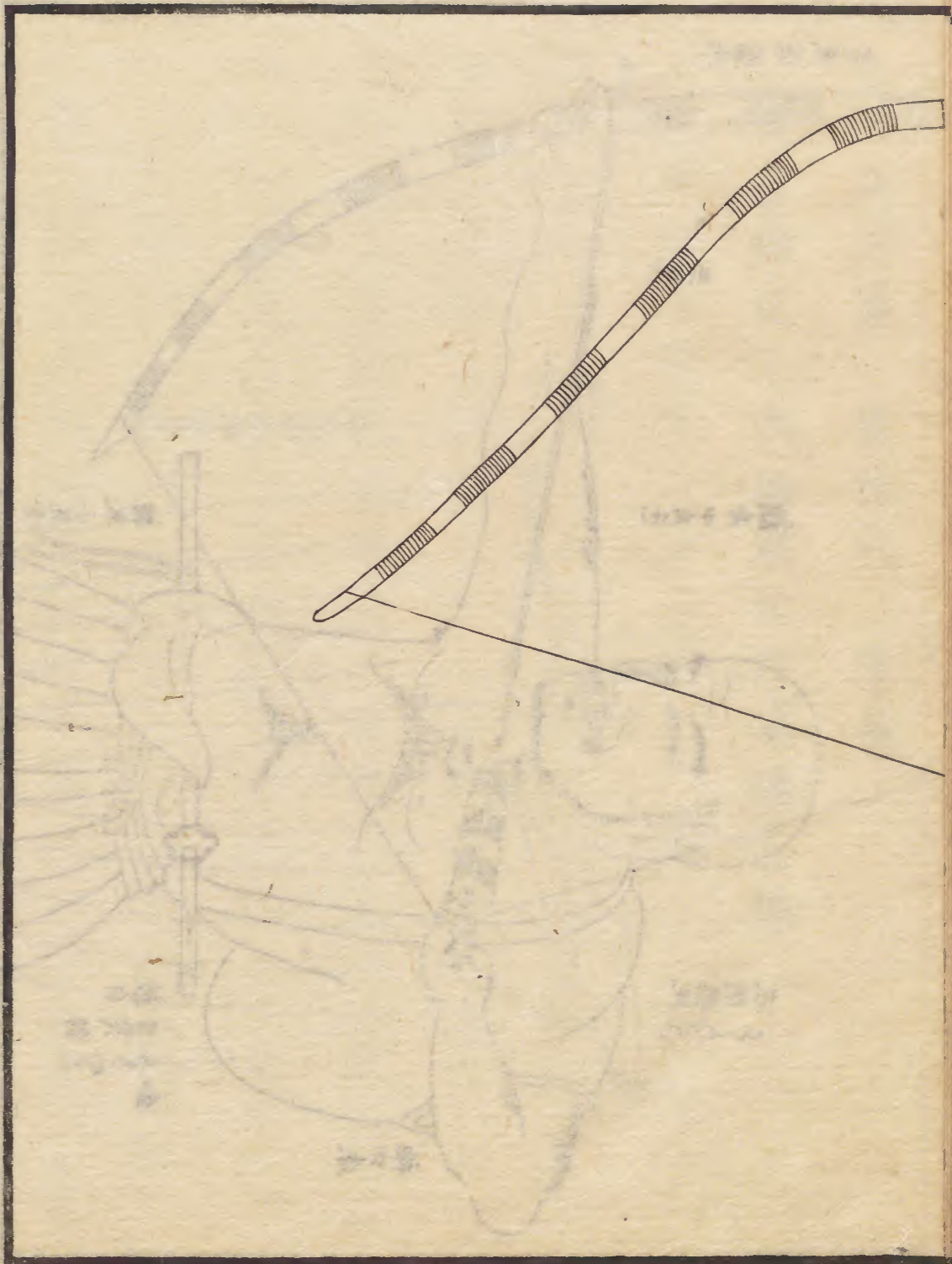
日置彈正正次瑠璃光坊威德肖像



日本古義一廿一

弓黑塗藤朱





日本古義一ノ廿二

太古之弓

天地開き生^{ナリ}出^ルる弓矢を吾國神武萬器の靈

主^ト志^ス多^ク天地と共^ニ尔^ル其^ノ德^ヲを同^クト^シテ 皇祖此

靈器を^シて^テ國家^ヲ治^ス先^ニ給^ヒし^テ弓矢を^シて

皇家^ヲ御^シ守^リ護^ルと^シれ^テ給^ヒし^テ惡^ク魔^ヲ朝^ヲ敵^ト逆^ト賊^トを^シて

被^シひ^テ萬^ノ民^ヲを育^ヒ一^ニ天下^ヲ泰^ニ平^ニ治^スむ^ニ弓^ヲ矢^ヲを^シて

吾國^ノ神^武第一^ノ靈^器と^シて 皇祖^ヲ持^テ給^ヒし^テ櫛^ノ木^ノ

ふ^ク造^ルる^ニ弓^ヲなり^テ天^ノと^ハ尊^ニ稱^ス名^ヲ詞^ヲあり^テ此^ノ木^ハ此^ノ櫛^ノ木^ノ

名^ヲか^シ一^ニ見^ルる^ニ弓^ヲなり^テ又^ニ給^ヒし^テ矢^ノ弦^トとい^フふ^ニ名^ヲを^シて假

義
弓矢弦の名

引^レ弦^ハル^ト約^シ生^ハ海^ニ故^スル
天^ノ鹿^カ兒^ゴ弓^ヲ天^ノ鹿^カ兒^ゴ矢^ヲといふを
同^ト鹿^ヲ射^ル弓^ヲ矢^ヲといふなり猪鹿ハ農作^ノ害
戎^ハ次^ニを^シる^ヲ程^ヲ彦^ト火^ト出^テ見^ル尊^ニ山^ヲ幸^ハサ^リて
弓^ヲ矢^ヲ持^ル多^クし^テ猪^ノ鹿^ヲ戎^ヲ追^ヒて^ハ萬^ノ民^ヲを^シ育^ス
給^ヒ一^ニ五^ノ穀^ヲ成^ス就^ス加^ヘ護^ス弓^ヲなり詞^ヲ轉^シて^ハ加^ヘ護^ス矢^ヲ
乃^チ弓^トい^フふ^ハ繁^ク其^ノ德^ヲ大^ニ己^ノ貴^ニ神^ト弓^ヲ矢^ヲ持^ル給^ヒ多^ク不^レ順^ナ
生^ル弓^ヲ矢^ヲといふを大^ニ己^ノ貴^ニ神^ト弓^ヲ矢^ヲ持^ル給^ヒ多^ク不^レ順^ナ
八十^ノ神^ヲを^シ追^ヒ避^スひ^テ國^ヲ戎^ヲ治^メ免^ル給^フ弓^ヲ矢^ヲといふなり

日本書紀一ノ三三

生^ルと^テ殺^スさ^レて^ハ八十^ノ神^ヲを^シ追^ヒ避^スひ^テ順^ニ志^スむ^ニ子^ト
此^ノい^フ詞^ハなり其^ノ德^ヲ大^ニ己^ノ貴^ニ神^ト戎^ヲ稱^シて^ハ大^ニ弓^ト志^ス
い^フぬ^ハ繁^ク生^ル弓^ヲや^ハい^フも^ハ大^ニ弓^トい^フも^ハ一^ニ弓^ヲを^シ
い^フふ^ハなり其^ノ製^ヲ乃^チ大^ニなり^トい^フふ^ハぬ^ハあ^リて^ハは
天^ノ羽^ハ羽^ハ弓^トい^フを^シ其^ノ弓^ヲ若^ク威^ニ勢^ヲ以^テ海^ニ状^ヲを^シ賞^ス
を^シ於^テ詞^ヲなり今^ノ世^ニ尔^ニ田^ヲ夫^ト此^ノ物^ヲを^シ賞^スを^シ詞^ハ羽^ハ
羽^ハ或^ハ羽^ト志^スと^テや^リむ^ハい^ハ一^ニ子^ト詞^ハ似^カか^リて^ハり
此^ノ等^ハ此^ノ弓^ヲ矢^ヲ乃^チ製^ス今^ノ世^ニ尔^ニ至^リて^ハ蝦^ノ夷^ヲめ^テ用^ス
申^ス海^ニ弓^ヲ矢^ヲと^テ是^レ吾^ノ國^ノ太^古に^テ遺^レ製^スなり

束革と巻く
古義

古今弓之製

人皇御代尔至^マ朝廷^マ射禮^マ用^ハいら
ま^ニ角乃弓といふを彌^ニを鹿の角^ハ造^ル弓^ニ束^ク
の上下に角を巻^クる^ハ弓^ハ好^クなり^キ古^ノ代^ハ束^ク革^ヲ
巻^クる^ハ脇^ヲ下^ニ本^ヲ彌^ヲを當^クる^ハ左^ノ手^ニ届^ク所^ニ
束^ク革^ヲ巻^クる^ハ多^クなり^キ夫^ノ木^ヲ抄^ク下^ニ信^ヲ濃^クお^ス
素^ノ佐^ノ原^ノ山^ノの^ノ梓^ノ弓^ヲ主^ニ定^ム今^ノ世^ニ用^ユゆる^ハ半^ノ弓^ヲ
是^レ即^チ角^ノの^ノ弓^ハ此^ノ遺^レ製^{ナリ}世^ニ尔^レ半^ノ弓^ヲを^シ異^ニ國^ニ製^ス
て^ハい^ハふ^ハ神^ノ功^ノ皇^ノ后^ノの^ノ御^ノ代^ニ尔^レ百^ノ濟^ノ國^ニ奉^ル
角^ハ此^ノ弓^ハ代^ハい^ハふ^ハ好^クなり^キ以前^ノハ^ハ吾^ノ國

早古義一廿四

尔角乃弓の製り^リ崇神天皇御代尔年貢の
事を弭^ニ調^ヒといひ奉^ルり^キ是^レ角^ハ此^ノ弓^ハ弭^ノの^ノ料^{ナリ}
なり遙^ニみ代^ヲを隔^テ清寧天皇此御代より蕃

國乃使人等來^ル時角^ハ此^ノ弓^ハ賜^ルなり^キ吾^ノ
國神武弓矢の徳を萬國より勝^ルる^ハを慕^ヒ受け
此時^ニ朝鮮^ノ亦^ニ吾^ノ國^ノの^ノ製^ル習^ヒ用^ヒを^シ
なり吾^ノ國^ノ文字^ハ事^ハ漢^ノ土^ニ習^ヒる^ハなり^キ

神武弓矢の事ハ吾^ノ國^ノ本^ノ形^ヲを^シり^キ勝^ルる^ハ
る^ハを^シる^ハ劣^クる^ハ習^ヒる^ハや^ハ劣^クる^ハを^シて^ハ勝^ル

色を以て習ふべしとや今を以て古に観察せば又
論定すべし吾國に善射の事上古より漢上
あを是を賞と爲し事なり然るも後乃世あを却て
漢國に書を證せしむ吾國に弓矢の事を論じ
るる至る神武此士を其本を論ぜばある處あり
らば故人もいへるや

日本古義卷之一終

